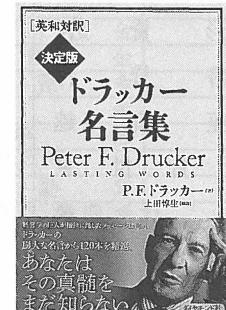




〔英和対訳〕決定版 ドラッカー

P・F・ドラッカー／上田惇生訳
ダイヤモンド社 1575円



言葉自体が思想なのだということが教えられる。

さらに、それまでの名言集と異なるのは、英和対訳のスタイルをとるところにある。英文併記というのは、実は英語学習以上意味を持つ。というのも、

一般的に流通する英和対訳の書物の大半は文学書である。日本人は明治時代から高度な訳詩文化を持つていたが、同時に原語による作品鑑賞を怠ることがなかつた。夏目漱石が漢詩の教養を持つつホイットマンやワーナーの詩を愛したのはよ

名言の価値とは誰が決めるのか。話者が意図して吐いた言語が名言になるとは考えづらい。

少なくともその成立機縁は話者の意図ではなく、反対に言語の受け手の感受性によって創造されると考えいい。本来ならば水がろ過されて純度を上げていくような長い時間的プロセスが必要なのかもしれない。

だが、ドラッカーのおもしろいのは、存命中から名言集が出版されていたことだ。いささか拙速に思えなくもないが、そこが生きながらにして古典を書いた者の特権というべきなのだろうか。まさに彼こそその種類の書き手だったのも確かである。ドラッカーは次の100年を創造する思想家の相貌を帶びつある。今さまざまの意味で彼の真価が言われる。一種のブルームでさえある。そんなドラッ

カーという人を思うとき、その相貌は私にとって常に経営学者ではない。まず卓越した言語の使い手だった。ドラッカーが自らのファーストラベルを書き手としたのも、自らの立ち位置を正確に理解していた証だつた。たとえば、「日常化した毎日が心地よくなつたときこそ、

「文体」に本質あり

違ったことを行うよう自らを駆り立てる必要がある」という一

文がある。言葉が一つの世界として生きて脈動している。韻律をはらんでいる。月並みな人生訓とも違う。何かを教えようとか説こうという姿勢はない。ただそこにあるがままの状態を自然な言語の組合せで表現する。

く知られる。
なぜなら言語にはある種の美観というか、ほのかな香りのよ

うなものが伴う。どの言語であれ、作家の魂を表出する限りにおいて文章には凜とした状（すがた）が映しこまれる。「文」は

常に諸刃である。扱いには気をつけなければならない。せつかくの名言も訓詁学になつては意味がない。ドラッカーの名言集が、かつての『毛沢東語録』にならないことを願う。本書にはノンブル（ページ数）がない。「読

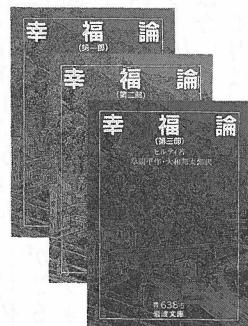
最後に蛇足ながら、言語とは常に諸刃である。扱いには気をつけなければならない。せつかくの名言も訓詁学になつては意味がない。ドラッカーの名言集が、かつての『毛沢東語録』にならないことを願う。本書にはノンブル（ページ数）がない。「読

社会生態学研究者 森里陽一



『幸福論』(全三巻)

ヒルティ／草間平作訳
岩波文庫 1575円



高尚なブログで自分の意見を不特定多数に発信しているようなものだ。その知的スタンスには現代に通じるものを感じられる。仕事についての章の中に次のような一節がある。

「働くためには、力を節約しなければならない。(略)われわれが無益な活動のために、どれだけ多くの仕事の興味と精力をそがれているかは、ちょっと口

には言えないほどだ。まず第一に挙げねばならないのは新聞を読みすぎること、第二に、不必

要な会合」。

ヒルティは19世紀にして、現代人以上の知識労働者だった。おそらく法律家と宗教家はもつとも早く成立した知識職業と考えていい。その証拠にヒルティは仕事を生計の資を得る活動に限定していない。むしろ個としてなされる精神的な仕事を高く評価している。むしろ仕事に会社も個人もない。トータルな人間活動としてとらえている。実際にはヒルティ自身も死ぬ直前まで働き続け、執務室で眠るように息絶えたという。

19世紀の知識労働者からの遺言

に考えようというものである。

その意味では、哲学思想の書と

いうよりも実践性を高度に加

味した宗教的書物の印象が強い。

たとえば、「仕事の仕方」「よ

い習慣のつくり方」といった章

がある。その合間に、哲学・倫

理に対する信仰の優位が説かれ

たりもする。いわば今でいえば

ことでもそうだ。

マイケル・サンデルの正義についての講義が日本で人気を博したのは最近のことである。寒い時期は深くものごとを突き詰めて考えるのに向いている。歴史に残る思想家や小説家がほぼ極寒地方の生活者であつたのも、理解できないではない。

19世紀の終わりごろ書かれたもので、著者はイスの法律家である。日本ではかなり早くから紹介され、戦前の一時期は若者を中心にはかんに読まれたものようだ。今回はこの本を取り上げることにしたい。

まず、「幸福論」と名乗つているが、いわば後付けのタイトルである。貫した意図のもとに書き下ろされたものではない。折に触れて書かれた処世のための考え方についての断章をまとめて一書としたものである。

世の中には同名の書物がたく

社会生態学研究者 森里陽一



『改訂徒然草』

吉田兼好著／今泉忠義訳注
角川ソフィア文庫
740

— 静かに思へば、よろづに過ぎにしかたの恋しさのみぞせむ

あえて大きくいえば、学びを促してくれる種類の本には、二つのタイプがある。一つは視野を広げてくれるものである。もう一つは思考を深めてくれるものである。古典は両者を完璧に満たしている。とともに二割程度の知識と八割程度の未知のものがある程度がいい。知っているわずかなポイントから深めているのがいい。

そう考へると、世には確かに枕頭の書ともいふべき書物が存在する。本書もその一つだ。寝る時にひもとき、いざという時に持つて逃げられる種類のものである。非常時に何より頼りになる書である。たぶん無人島に持つて行きたい一冊にあげるのなら、日本人のなかでは上位に

入っていい書物の一つと思う。
乗り越えるべきものが多く抱えつつ、それでも前進していくかなければならない時こそ、そんな風雪に耐えた書物を手に取りたいものだ。そこに馴染みの言葉で書かれつつも、知られるとのなかつた、無限に応用可能なソフトウェアが広がる。

する。外国の日本研究者で「徒然草」から入ったという人も少なくないと聞く。そこには、日本人の美意識と時間意識がもつとも身近なリズム感とともに凝縮的に表現されている。

らを救うのみならず世界に役立つ最高の道と思う。今回日本人が思う以上に、世界は日本を注視しているのを誰もが知った。世界が日本の中に世界全体の行く末を見ている。

ますありがたいのが文庫である。そのうえ現代語訳も付いている。せわしなく明滅する現代の情報社会にあって、歴史的情報的時間意識の重みを受け止めるチャンスである。一度ネットや携帯から手を離して、心の動き、意識の営みに思いを馳せな

から、自らの生きる今という時間の一区切りを考えてみるのは決して無駄にはならない。折しも近代技術の矛盾が直接的に露呈した今日である。日本は世界に先んじて絶望的矛盾と真正面からぶつからざるをえなかつた。ならばその問題を自らの流儀で説くことが、ただに自

非常時の読書——日本人の意識

促されて大きいえは、学びを促してくれる種類の本には、二つのタイプがある。一つは視野を広げてくれるものである。もう一つは思考を深めてくれるものである。古典は両者を完璧に満たしている。ともに二割程度の知識と八割程度の未知のものがある程度がいい。知っているわずかなポイントから深めているのがいい。

そう考えると、世には確かに枕頭の書ともいるべき書物が存在する。本書もその一つだ。寝る時にひもとき、いざという時に持つて逃げられる種類のものである。非常時に何より頼りになる書である。たぶん無人島に持つて行きたい一冊にあげるのなら、日本人のなかでは上位に

入っていい書物の一つと思う。乗り越えるべきものを多く抱えつつ、それでも前進していくなければならない時こそ、そんな風雪に耐えた書物を手に取りたいのだ。そこに馴染みの言葉で書かれつつも、知られることがのなかつた、無限に応用可能なソフトウェアが広がる。

非常時の読書

から、自らの生きる今という時間の一区切りを考えてみるのは決して無駄にはならない。折しも近代技術の矛盾が直接的に露呈した今日である。日本は世界に先んじて絶望的矛盾と真正面からぶつからざるをえなかつた。ならばその問題を自らの流儀で説くことが、ただに自

全体を統御し回復していく要是日本人の意識以外にありえない。内田樹氏の言う「自らを変える方法は変わらない」からだ(『日本辺境論』)。あらゆるプロトコルを絶対視せず、世界全体のシステムの変化に付き合う形で自らを変えていくことだ。本書はそのための考え方を説く。

同時に傷付き果てた心を励まし、慰撫してくれる。このように立ち返るべき場所を持つ国民は幸せである。逆に言えば、いざという時先人の知恵や助言を参考できない社会ほど不幸なことはない。

「万(よろづ)のこととは頼むべからず。(略)必ず變ず。(略)ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず」(一一一段)。

全体を統御し回復していく要素は日本人の意識以外にありえない。内田樹氏の言う「自らを変える方法は変わらない」からだ（『日本辺境論』）。あらゆるプロトコルを絶対視せず、世界全体のシステムの変化に付き合う形で自らを変えていくことだ。本書はそのための考え方を説く。同時に傷付き果てた心を励まし、慰撫してくれる。このように

社会生態学研究者 森里陽一



『キュレーションの時代』

佐々木俊尚 著
ちくま新書 900円



れば、いかにソフトウェアの変容が現実のハードを変えてしまはダウンして使いものにならないくなつたのに、ツイッターは健在で安否確認に大いに役だつた。このような新メディアはソフトとハードを共時化していく

時代の違和感に目を向ける

も、その多くが音楽や映画、小説など、トリビアとしても得する情報として工夫されている。「ここ」のメディアが育つている。この本で書かれている流れを、この本で書かれている流れを、実際に今の時代は、「後でグーグル検索してもらえるか」が情報の流れを決定的に決めてしまう。しばしば検索ワードの上位を見ると、確実に世の趨勢を反映しているのに驚かされる。

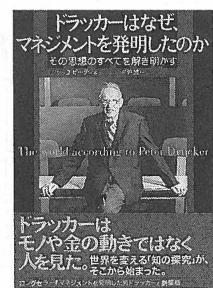
特に現在震災後の未来像がまだ見えていない日本は、メディア世界の白地図である。新たな世界像を先駆的に導入し、創造しない。いざれにしても、一読して損はない本である。

社会生態学研究者 森里陽一



『ドラッカーはなぜ、マネジメントを発明したのか』

J・ビーティ／平野誠一著
ダイヤモンド社 1600円



『もしドラ』が行く先々で視界に入り、映画やアニメにまで焼き直される現実を見るに及び、ドラッカーという存在の不思議さを実感させられる。すでに2005年に亡くなつた論者なのに、存在感はかえつて増していく。時代のキーワードにさなつてゐる。戦後に発展した経営学の各論分野は、あえて言えば、ドラッカーのマネジメントの脚注にもしがない端物の知識のようにも思えてくる。

「経営の神様」とも称された彼を学ぼうとする人はとにかくも多い。だが、彼の出発点が経営ではなく、芳醇かつ高貴なウェイン文化に發しているのを知る人は少ない。おそらくマネジメントに関心を持つならば、ドラッカーの素顔と文化的環境への興味を避けて通れないと思う。実際のところドラッカーにつ

いてまとめられた伝記的書物のなかで、本書ほど復刊が待ち望まれていたものはなかつた。当初は『マネジメントを発明した男ドラッカー』のタイトルで刊行されており、しかるべき筋の評価は得てはいた。だが、このタイミングで改めて読むと、なかなかに隠し味の利いた書物な

い。そこで、表題の『ドラッカーはなぜ、マネジメントを発明したのか』だが、多くの人にとつて違和感のあるものと思う。そもそもマネジメントというのを「発明」なのか。発明と

『もしドラ』の次に読むべき本

のがわかる。というのも、本書が扱うのは、人間としてのドラッカーである。そして、もつとも人を惹き付け、学ぶ者の刺激となる情報がそこにある。ドラッカーの思惑や動機である。マネジメントを単に金儲けの手段と誤認したり、人を管理する方法とする

いうと、レントゲンとか、レーダーといった科学技術のイメージがある。だが、本書を読めば、確かにマネジメントという体系的知識

馬という自然の存在を実際の役に立てるための方法が、体系とシンガンのようないねいに打ち碎いてくれる。それだけに、ある意味ではドラッカーによる著作を読む前に一度眺めておくとその世界の広がりと深みが適度に頭に入るしかけになつてゐる。

浅薄な観念を本書の一つひとつに記述があたかも精度のいいマシンガンのようないねいに打ち碎いてくれる。それだけに、それは一つのものの考え方であつて、体系的な方法でもある。なかにはドラッカーいう名など聞いたこともないままに無意識にいふ。その方法を行は人は無数にいる。いわば物事を曲がりなりに馬という自然の存在を実際の役に立てるための方法が、体系とシンガンのようないねいに打ち碎いてくれる。それだけに、ある意味ではドラッカーによる著作を読む前に一度眺めておくとその世界の広がりと深みが適度に頭に入るしかけになつてゐる。

浅薄な観念を本書の一つひとつに記述があたかも精度のいいマシンガンのようないねいに打ち碎いてくれる。それだけに、ある意味ではドラッckerによる著作を読む前に一度眺めておくとその世界の広がりと深みが適度に頭に入るしかけになつてゐる。

社会生態学研究者 森里陽一



「見える化」勉強法

遠藤 功著

日本能率協会マネジメントセンター 1575円



久し振りに当たりの本に出合った気がしている。「見える化」や『現場力を鍛える』などのベストセラーで著名な外資系コンサルタントによるものである。タイトルには勉強法と銘打つてあるが、勉強のしかたの詳細について書かれたものではない。正確には仕事をするうえでの考え方、意識の持ち方を教えるものとみてよいと思う。著者の肩書きを見て、外資系の会社で卓越した成果をあげてきた方ならではのスマートさ、ロジカルさ、そしてそれに伴うかすかな傲慢……が表れた本なのか——、と思いまして、そのような。というより正反対であつてそんなものほど本書からかけ離れているものもない。

粘っこく、泥くさく、ある面で日本の持つ良さも悪さもすべて内に取り入れた懐の広さがある。その語り口はや

さしく、おおざっぱで、気取るところがない。しかも、論に偏るところがなく、逐一経験と見聞で具体的に心に落ちるように工夫されていない。頭に訴えかける本ではない。むしろ頭だけで考えるのではなく、身体総動員で考えよと説く。

頭脳偏重にブレーク

現場派のコンサルタントが日々何を考え、どのような姿勢と方法で仕事をしているのかも克明に記されている。一般的に言つてコンサルタントの世間的イメージは決して芳しいものとはいえない。火のないところに煙を言い立てるくらいならまだしも、その煙を観念的に捏造することができるとする。

て、結果クライアントから巨額を巻き上げる者のようにも言われる。おおむねそのあたりがコンサルタント、とくに外資系の手口くらいにみなが思つていだが、何ごとも本物はいるのだということをこの本は教えてくれる。成り立ちが違うのがよくわかる。一言で言えば、人と現場への深い視線からそのことが窺い知られる。現場を徹底的に回る。主觀からのスタートを奨励する。正しい答えなどを十分に知り

さらに、すぐれた仕事人に特徴的なのが、個性的な道具である。何か仰々しくも華々しい小道具、がたくさんあるのかと思つたが、あにはからんやそうではない。著者が使うのは百円のノートとペンで、手書きのアナログ感でメモをとりながら考えるのでいう。

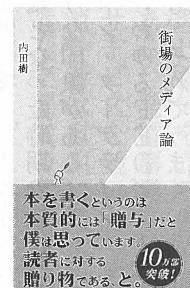
ながら、自分の目で見て考え方を下す。下手な仮説などは立てない。ロジカル・シンキングも信用しない。むしろ五感で得たものの、著者の言うところの汗のにおいのする情報をどう集め、どう解釈するか、そのことでかなりの詳細な実像を知ることができるとする。

社会生態学研究者 森里陽一



『街場のメディア論』

内田 樹著
光文社新書 777円



職業柄かふだんからメディアの問題には関心を持っていると、いか持たざるをえないのだが、久しぶりにメディアの不調について納得できる理説を示してくれた本に出合ったので紹介させていただきたい。

ほぼ現代人の知の成分表示はテレビとかネットといつたいくつかのメディアから選択的に形成されているのは間違いない。その意味でメディアの不調は現代人の知の不調にもつながるなかなかに重い問題である。

本来は大学の授業でなされたメディアと知に関する発言をもとに、学生や編集者などの広範なフィードバックを経てつくられたとはしがきにある。確かに一人の人間の頭の中で専的に培養された考えというよりは、メディアや知を社会的システムとしてとらえようとする縦横無尽な頭の使い方が光る。

「街場のメディア論」の問題には関心を持っていると、いか持たざるをえないのだが、久しぶりにメディアの不調について納得できる理説を示してくれた本に出合ったので紹介させていただきたい。

ほぼ現代人の知の成分表示はテレビとかネットといつたいくつかのメディアから選択的に形成されているのは間違いない。その意味でメディアの不調は現代人の知の不調にもつながるなかなかに重い問題である。

そこでは現代にあつてドミニントなメディア批判が豊かな教育知とともに展開される。まずもつて納得させられるのがテレビと新聞、そして出版である（なぜかラジオに対して向けられた視線は温かい）。

いやしくもメディアの末席を汚す私がこんなことを言つてい

事理を教えてくれる本

いのかわからないが、よく考えてみればここ何年かきちんとテレビを見た記憶がない。そればかりか、熱心に新聞を読んだ記憶もない。ではそれで大勢に劣後するような恥ずかしい経験があつたか。まったくない。一度も困つたことがない。

著者はそれらの主要なメディ

アで横溢する情報の「定型性」を批判する。そこではいかなる責任もとられることなく、誰のものでもない言葉が氾濫する。確かにそのようなものが人の中に届くはずもない。だが、実態が失われ虚像と化しても、生活の中で育まれた慣習は残る。おそらく20世紀、とくに戦時にあつて新聞やテレビが巨大な影響力を持ちえたその遺骸に対し頭脳と言うよりは体が反復的に対応しているだけのようにも思われる。では、よく言われるテレビや新聞に未来がある

のかとの問い合わせに対し、著者の回答は明快である。「ありません」。おそらくラジオを除くマスを対象とするメディアなら、その不調の責任から逃れられないだろうと著者は言う。なるほど――。

ならばネットがそれに代替するのか。そのような半ば紋切り

的な発想に対しても著者は鋭い刃を向けてくる。そんなはずはない。むしろメディアに本来求められるコミュニケーション機能がきちんと果たされていない。不調はそこに人々が気づいて合理的に行動しているだけとする。そもそもメディアとは社会の中で情報のフィードバックを促し、社会を構成する人々に適切な判断材料を与えるのがその主たる任務であつて、「ビジネスとして成立するかどうか」などは事後的な問題にすぎないし、社会の側のあざかり知るところではないのだと筆者は喝破する。

確かに、この言葉は重い。一般に言って消費者は靴屋を儲けるために靴を買うのではない。理屈は同じである。ビジネスとして成立するかどうかも、一定の社会関係におけるコミュニケーションの成立に関わる問題である。この忠告を真に受けられるかどうかが次なるメディアの状況を決するよう思う。

社会生態学研究者 森里陽一



「移行期的混乱」

経済成長神話の終わり

平川克美著

筑摩書房 1680円



いいタイトルである。こんなふうにぴたりと決まるタイトルが読む者の心に痛がゆい何とも言えぬ緊張感を与えてくれる。

著者自身が最初に明言するように、回答の所在を示すものではない。むしろ大切なのは原型的な問いの変奏であって、最終行が一行空欄になっている。空欄を埋めるのは読者である。そこにはこう書かれている。

「さあ、ではわたし(たち)はどうしたらいいのだろう?」

その意味ではこの数年から

数十年にわたる時間軸を伸縮自在に視座に收め、今という時代を考えるヒントを与えてくれる種類の本である。そのすべては著者自身の生きてきた軌跡とほぼ同じであつて、時として詩的なノスタルジアとともに追憶され、現在という時代が占める特性を物語的な切り口で教えてくれる。

実際に今の中は厳しい。本当に厳しい。控えめに見積もつても、10年前より確実にしのいでいくうえでの厳しさは増している。巷間言わるのは、人口減少、グローバル化への不適応、倒産率の上昇、自殺率の高止まりといった問題に次ぐ問題である。それらを問題と認識

本当に厳しい。控えめに見積もつても、10年前より確実にしのいでいくうえでの厳しさは増している。巷間言わるのは、人口減少、グローバル化への不適応、倒産率の上昇、自殺率の高止まりといった問題に次ぐ問題である。それらを問題と認識

らずあるはずなのに、いつこうに病状が回復しないとなると、そもそも病気の定義、あるいはそもそもそれが本当に病気なのかさえ疑いたくなる。それは病気ではなく、正常な生体反応だつたのではないか、それが本書を貫くものの見方だ。

基本的なパースペクティブでは、現状を「移行期」にあるとする。移行期にはしかるべき身繕いのための混乱状況を伴うという。一例として多くの人が政府の無策を評するのに、成長戦略の不在を言い立てたことがあつた。それに對し著者は言

う。 「問題なのは、成長戦略がないことではない、成長しなくていいことではない、成長しなくてもやつていけるための戦略がないのが問題なのだ」。

軍人は常に過去の戦争を戦うラック10台分も書かれ、そのなかには実行されたものも少なかれ。妙味は問題というものの捉え方を問題にするところにある。確かに問題に当たつての一見クリアカットな処方はそこかしこにある。しかし処方箋がト

う。 「問題なのは、成長戦略がないことではない、成長しなくていいことではない、成長しなくてもやつていけるための戦略がないのが問題なのだ」。

軍人は常に過去の戦争を戦うラック10台分も書かれ、そのなかには実行されたものも少なかれ。妙味は問題というものの捉え方を問題にするところにある。確かに問題に当たつての一見クリアカットな処方はそこかしこにある。しかし処方箋がト

社会生態学研究者 森里陽一



『金融機関支店長のための 仕事力養成講座』

行本明説・谷川昌司著
東洋経済新報社 1680円



近年の流れを見ていると、さまざまなツールを使ってタイムマネジメントを行うことができるので気づく。典型的なのはiPhoneとそれに伴うアプリだ。仕事を行ううえでは言うに及ばず、就職活動を行う学生にとっても必須のツールとして定着しつつある。一昔前ならば、ふつうの手帳が一冊あればさほど不便はなかった。予定を確保し同時に備忘的な機能を持てばどんなに複雑な対象を扱う業務でも事足りた。しかしそんな古きよき時代も昨今ではむしろ贅沢になりつつあるようだ。現在のタイムマネジメントとは單なる時間の「管理」では足りない。できる仕事に自らの活動を傾斜配分しうるような高度の意識上のベンチマークになつていてる。

実際に、多少仕事をしたことのある人なら誰でも知る事実がある。どんな仕事であつても、

から入らなければうまくいかないのか。ミヒヤエル・エンデが『モモ』の中で言つてゐる。時間とは心であり意識である。とにかく知識社会化が進展するにつれて、人は時間から解放されたか見えつゝ、実はいつそう巧みに時間を使いこなす必要に迫ら

「時間から入らなければうまくいかない」ということだ。一見するとなすべき仕事があつて、見ればうまくいくような気がする。だが、それは錯覚であつて、できる人は多くの場合、その仕事が要求する時間の割り出しがからスタートする。なぜ時間

タイムマネジメントの心技体

タイトルにあるように金融機関支店長を中心としたターゲットとしている。だがそこで述べられているのは、仕事全般について必要なスキルばかりで、一定の普遍性を持っている。たとえばかなりの重点が置かれるのが、ハウツーよりも意識の置き方である。コミュニケーションの取り方などは一見無関係に見えても、結局のところ時間配分という意識の向け方に関わりを持つ、持たざるをえない。

さらにタイムマネジメントと

いうと、つい自分の時間をどう配分するかに意識がいきがちながら、他者の時間や意識への配慮とそのためのスキルが随所で示唆される。知識の運用に関する仕事について言えば、ほぼ単独で成立する仕事など存在しない。ならば、自らの時間をいかに組み立てるかと同時に、他者

の協力を得るべく相手の時間の尊重も必須のものとなる。金融機関支店長や金融機関全般でいうのは、仕事全般について必要なスキルばかりで、一定の普遍性を持っている。たとえばかなりの重点が置かれるのが、ハウツーよりも意識の置き方である。コミュニケーションの取り方などは一見無関係に見えても、結局のところ時間配分という意識の向け方に関わりを持つ、持たざるをえない。

さらにタイムマネジメントと

いう、「管理的」な視点ではなく、他者の時間も含む意識の振り向け方を生き物を扱うような繊細さで描いているのが興味深い。おそらく単なる通り一遍の書籍を学ぶのならば適した書物はほかに多くあると思う。だが、スキルといふものは心技体の一環としての有機的構成を経ない限りうまくは使いこなせない。限られた時間で仕事をしたことは多少とも仕事をしたことがある人なら知つてゐるだろう。基本的な考え方を学ぶための入門書として推薦に値するものと思う。

社会生態学研究者 森里陽一

『なぜジャパンはなぜ世界になれたのか?』

平田竹男著
ボプラ社

1365



評者、もとよりサッカーにあまり関心がなく、日韓戦などに限つてのみテレビで何気なく観るくらいだった。まして女子サッカーなるものがあるなど知つたのはつい最近のこと。正確にいふと今回のワールドカップのちょっと前に過ぎない。

それにしても、なでしこジャパンの日本のスポーツ界に果たした役割は大きい。サッカーを知らないだけに、かえってその偉大さが実感される。この本は日本サッカー協会専務理事にして、Jリーグやなでしこジャパンの立ち上げ、そしてワールドカップをはじめとする大きな大会のマッチメイキングで辣腕を発揮した専門家によるものである。豊かな色彩感覚溢れる体験の世界がそこにはある。

テーマはスポーツながら、そのなかにはたくさんビジネス

年以上あるとはいへ、今なおきちんととしたビジネスとして成立するにいたつてはいない。要は見えた目はともかくごく地味な世界である。選手のなかにはスーパーでレジ打ちをしながら競技を続けた人もいたくらい、プロスポーツとしての基盤は未成熟だつたという。

それは偶然ではなかつた

や社会にあつて学べるものか詰まつてゐる。なかでも特徴的なのは、華やかな世界の裏側にある地道でひたむきな努力やそれに伴う戦略が克明に描かれていることだ。

一時期大ブームを生んだJリーグのようなものと異なり、女子サッカーの世界の歴史は40

スポーツビジネスで強調されるものとして、トリップルミックス・ションという概念がある。勝利、普及、資金からなるもので

しかも、この10年ほど、経済的な不況も相まって、幾度も荒波と破局の縁を抜けてきた。そのあたりのことが、ごく緻密に、かつ生き生きとしたストーリータッチで描かれている。一般的なでしこジャパンの優勝などは私のような素人の知りえぬ、長きにわたる涙ぐましい努力と戦略の勝利であつたことがよくわかる。

だけではない。スポーツといふのはおそらく現実世界の社会ビジネス、ひいては世界そのものをシンボリックに表現したといわば実験室である。そこで可能ななものならば、成長のモチベーションとしての将来性を持つはずである。一風変わった指南書としてお勧めの一冊といえる。

ているスポーツもある。ラクロスやフットサルなどがその典型だろう。実は女子サッカーも先の三二のコンセプトをふまえながら、きちんと展開のための努力がなされた結果として今がある。本書では選手一人ひとりの思惑や、メディア戦略、マッチメイキングの裏側までをも丹念に描きながら、そのあたりの構図がうまく理解できるよう工夫されている。それはビジネスの戦略そのものと言つてよい。さほど関心のない評者でさえ一気におもしろく読めたほどだ。

社会生態學研究者 森里陽一

書評

『伸び続ける会社の「ノリ」の法則』

遠藤 功著
日経プレミアシリーズ 893円



人が少なくなつたと感じることがある。以前は新宿南口の甲州街道などは真夜中まで車で埋め尽くされていた。今ではまばらな時が目につく。都心の大通りでも、平日の昼間にさほどの人出がなかつたりすると、やはり人口減少を実感させられる。都心でそれなら、地方においては想像もできないほどであろう。

環境は刻々と変化していくが、企業をはじめとする組織がその変化にうまく乗れているかといえば、おおかたが悲観的な見解をとらざるをえないのではないだろうか。

よくいわれるよう、お金だけあつても人だけいても、それだけで勝手に生産性が上がつてくれるほど組織は単純ではない。明らかに目で見える数字以上の何かが人間組織には存在するからだ。この本はその「目に見えない何か」を追求したもの

ギーを自らの糧としうるかが組織の発展を左右するとまで言いつてゐる。そこでまさしくそのエスカレーターの運営は、アーチーのスティング・ライズのスケーリング・アップである。時々、ロックのライブなどにいくと、自然に観客の身体動作が同様である。

語彙がビジネスになかったのか、そのほうが不思議に思えてくる。しかもノリの善し悪しは必ず誰もが体験している。「日本人はラテン系」と著者はいう。70年以降の生まれの人にはおそらくびんとこないのだろうが、50年代、60年代を生きた人にとっては、この言葉は真率な同意とともに胸に蘇るだろう。高度成長期はお祭りに似ていた。反政府の学生デモでさえ、お祭りそのものだつた。それがバブルの

さされている。たとえば、浜松の都田建設では、週に一度、50名ほどの社員でバーべキューによる昼食会が持たれるという。共同体の基本は食卓をともにすることだ。人間も生き物である以上、命の自律的論理に抗うことはできないし、それを前近代的と一蹴する権利など誰にもない。むしろそんなささやかな営みを切り捨ててきたから、今の日本の停滞があるのでこの本は教えてくれる。

一つひとつの事例が、会社と

説明できないものに目を向ける

じものになつてゐることがある。あるいは、祭りの時の人々の動きやリズム感などはぴたりとそろつている。

崩壊以降、内部のエネルギーまでもが消滅してしまった。失われた20年は「ノリ」の失われた20年だった。

しかし、現実をつぶさに見れば、完全に消滅したわけではない。地方の企業、比較的規模の小さい企業のなかで、きちんとその命脈を保っている。その生態がついねいにケーススタディ

いという向きもあるかも知れない。しかし、生命体とはもともと定義が不能で、曖昧な存在である。人は死んだものを説明することはできても、生きているものを説明できないからだ。生きているものは説明するより感じるものである。おそらくそのあたりに思いを馳せよと教えてくれているのだろうと思う。